

猪犬と登る猪猟の頂点へ

猪猟の上級編

③

田宮 治

猪猟の決め手

大物猟をやってきて一番気に入ったのが猪猟である。そのため、猪止め犬を自分で作ろうと決断して全国から素材犬を探し求めるようになった。それが苦難の始まりで、迷路に突入するきっかけになったのである。猪犬を作るというこの決断こそが、私の今ある猪猟の決め手となっている。

その頃は失敗を繰り返しながらも素晴らしいアニー号やトム号、それに猪止め犬の仔犬の訓練にも貢献したりオ号、チャカ号など、一流の追い犬も申し分なく仕上がっていて、一人でも十分に獲れるようになっていた。

「田宮さん、なぜこんな良い犬たちを一人で使っているのか」

と、よく不思議がられた。

確かにグルーブ猟であれば、この犬群ならではの見事な猟ができるに決まっているが、私の目指しているのは誰の手も借りずに一人でやる猪猟である。

だから追い犬でもアニー号たちの芸域になれば、足の強い若い時は猪でも鹿でもそこそこは獲れるだろう。だがこの先、走れなくなる自分と追い犬を単独で使う限界を感じていて、猪止め犬との利点を比較していた。

猪犬は、私にとって郷里で子ども頃から父や兄たちの後を追った猟体験があり、物心ついた頃から犬たちは遊び仲間であった。そして二十歳から鳥猟を始め、その次にやる大物猟は前記のとおりであり、その時々には最善を尽くして全力で頑張り続けてきたので

ある。

だからこそ、追い犬の本質でもきちっと見定められたし、特にアニー号の仔犬たちは立派に作り育て、仕上げてきた。

アニー号には血統書も付いていたので、何の心配もなくみんな良い犬になって全国で活躍している。現在も犬舎に二十頭くらいの見事なブルーチックが元気で吠えまくっている。

このブルーチックの後にひくグオーン、グオーンという追い鳴き音が私は大好きである。鳴き声にせき立てられ、大猪でも鹿でも熊までも立ち向かうのを忘れて、一目散に逃げるのである。

追い犬をグルーブ猟で使役すれば最高に面白いが、その芸質の中で一番良い追い犬の本質はやはり鳴き声である。香り鳴きに始まり、起こし鳴きから追い鳴きに見事に繋がる連続鳴きは、よく通る声で、獵人の心を踊らせるもので、絶対に途切れないのがよい。獲物をどこまでも追って、撃ち獲るまで追い切る犬たちでない。追い犬としては失格である。また追い犬であっても、どこまで追って行こうが必ず放犬場所に戻って来る、戻りの良い犬たちでなければならぬ。以上が追い犬に求められる条件である。

追い犬は、あくまでも追って鳴き止めるだけで、小猪やどんなチャンスがあろうとも、咬み止めに出来る芸はその先に死が待っている芸なので、絶対に寝てはならない。さらに戻りの大切さであるが、とにかく大山でもそれを越えての大追跡となる場合があるが、それでも一流の追い犬は何時間か

けても必ず戻って来るのである。日頃の訓練から犬たちを信じ、じっと待つてやることである。そうすれば犬たちも主人が待つている所に必ず戻って来るものである。

追い犬はこの何でもない放犬場所には必ず戻るといふことが、私の実践体験ではとても重要となつてくる。この訓練がしっかりと出上来がっていないことには、とても安心して猟などできない。

もし仮に人懐っこく育てて、誰にでもすぐ捕まる猟犬を単独猟で使うとしたらどうなるだろうか。使ったことのある猟人であれば、その先に起きる最悪な事態が想像つくと思うが、私は過去に何度となくそうした事態に遭遇している。

天性の猟能

一生懸命に頑張つて仕上げたトム号やチャカ号の名犬でさえ、実は行方不明で終わっている。仕込み中の若犬ならばいざ知らず、トム号やチャカ号クラスの名犬たち

が鹿を追って行ったきり戻って来ないことなど考えられなかった。しかもいつもの十枚山の猟場においてである。

一カ月間も捜し求めたが、残念ながら発見できなかった。現実問題として、元気で見送ったのが最後では諦めきれぬものではない。さらに、ポインターとセター二頭を猟期の始まる前日に犬舎より連れ去られたりしていた。

私は何度もこのような耐えがたい体験をしてきた。こうした過去があったからこそ、猪犬作りでは絶対に人に捕まらないシャイな性質を最重点に仔犬作りに励んできたのである。

私の猪犬作りは、こうした体験が基になっている。しかし、それでは駄目だから自分に合った良い犬たちに作り変えている。そんな仔犬作りの中でも最悪な事態だけは絶対に起こさないように、シャイな性質を大切にすることを今でも注意している。

基本的に洋犬（ブルーチックなど）は人懐っこいが、アニー号はそんな理由で人に捕まらないシャ

イな性格であった。シャイな犬たちは間違ひなく戻りが良い。シャイな性質や鳴き声、追い立てる姿などは、個々の犬たちが持つて生まれた天性の猟能による場所であり、訓練によって出来上がるものではない。

この大切な天性の猟能が、ある大居士の支配によってのみ確実に受け継がれていくのであり、この繰り返しのよって猟能が極限まで高められるのである。

こんな何年もかけてやっと分かる難しい基本も、アニー号のような名犬が出来上がってしまったばしめたもので、わが犬舎のブルーチックも猪犬（和犬）でも、みんなシャイで戻り、抜群の猪犬たちがぞっくり揃ったのである。

本来ならば、追い犬の名犬アニー号を使つての単独猟で見事な猪撃ちや、リオ号とトム号の一流芸で、その頃の目標であった鹿の初獲りなどの苦勞話を記述してみたところであるが、すっかり昔話になってしまった。

そのうち時期がきたら、若い頃の成長期の戦いぶりなので、笑わ

れても良い気分です投稿してみたいと思つているが、目下のところは現役バリバリで身も心も元気であり続けたい。

若犬であろうと年をとった老体であろうと、いったん実戦を挑むからには現役バリバリで戦い抜かねばならない命懸けの真剣勝負である。ズバリ言いきるならば、大物猟は度胸で撃つものであり、名犬は思いやりで仕上げるものである。そんなわけで、私の猪猟体験は激戦と努力の連続であった。

私がここで猪猟人に分かつていただきたいと思つていることは、私がどんな方法で猪猟人としての苦難を乗り越えてきたかという、人生を懸けた生き様を知ってもらいたいのである。

したがって、追い犬を使つて猪や鹿を追つて夢を大きく膨らませながら目標達成に向けて突っ走つていた時代は、猪猟や猪犬そのものを実戦で学ぶ暗中模索の中で、一番良いことや自分に合った猪犬を探求し続けることであつた。

それが結論に到達するまでの、大切な成長期の教訓であつたと思

っている。したがって、この頃の
頑張りなくして今の私や名犬群は
なかっただろう。

もうすっかり遠くなってしまっ
た私の若かりし頃の挑戦は、大き
な夢の実現に向けて大切な足が
りとなった重要な基礎作りの時期
でもあった。

猪猟では何が大切で猪犬はどん
な犬たちが良いかなどをすべて体
験で吟味して、これが一番良い方
法だと自信をもって発信する大切
な芽として、推し進めたい猪猟法
や猪犬作りが心ない批判にさらさ
れ枯れ果ててしまい、十分に伝わ

らず分かってもらいたくない。何
事についても味方千人、敵千人で
ある。

もしも猪猟法なり猪犬作りをよ
く知らない人が、面白おかしく書
き立てる中傷記事を真に受けたら
どうだろう。抜け出せない迷路に
踏み込むか、不安に耐えきれず諦
めて終わってしまうはずである。

あくまでも他人それぞれではあ
るが……。私が経験してきた事実
は独断と偏見ではあるが、これが
一番良いことだと心に決めて全国
に発信し、分かってもらいたいと
考えた肝心な芽である。



左よりアニー号、サム号(種牡)。この組み合わせの
仔犬はとても相性がよく、良い仔犬が各地で活躍し
ていた。そんな話を聞くと、犬作りに本当の自信が
湧き、何より嬉しく元気が出たものだ

だが一方で、批判や中傷が猪猟
道を登り詰めていく高さに比例す
るように高まることも確かであ
る。

私が言っておきたいのは、獵人
誰もがいったん心に決めたからに
は、目標達成に全力であたるべき
であるということだ。どんな困難
でも、自らの考えで見事に乗り越
えてもらいたいのである。

私の場合、「よし、それならばこ
れでどうだ！」と生来の負けじ魂
に火をつけ、猪猟道を登り続けて
きた。何も今さら面白くもない理
屈攻めをする気や自慢話をやって
いるのではない。

名犬への道を推し進めていくた
めには、せめてその前に完成まで
の私の体験談の中から何でもい
から猟法や猪作りの手がかりと、
絶対にブレない強い心構えを汲み
取ってもらいたいと思っっているだ
けである。

この辺のことがよく理解でき
て、十分に分かっていただけると
うに、つたない私の苦難の猪犬作
りや猪猟道の道程をできるだけ詳
しくありのまま説明してきたので

ある。ぜひとも注視してほしいの
は、発信する大切な芽をどのよう
にして守り育ててきたかである。

確かに大切な芽を阻害する批判
や中傷を打ち消すのは大変であ
る。正面きってやれば誌上バトル
になりかねないからである。

ただ一つの実例として「一胎の
仔犬はバラツキがあって、みんな
良い犬にならない」と指摘された
ものでも、それを実際に実戦で挑
戦してみせ、成長させ、完成して
きちっと証明するにはどう頑張っ
ても五、六年はかかってしまう。
しかも一流猪犬にできなくて駄目
犬で終わらせるかも知れぬ、獵人の
持ち合わせている猪猟の実力によ
るものなのである。

おしなべて私があ言われたと
か、こう批判されたなどは、実直
に言うならばどうでもよいことで
ある。それよりも大事なものは、私
がこんな批判や非難を自らの力で
どう考えて、挑戦して乗り越えて
きたかということと、目標を立て
直し、挑戦し、検証して、さらな
る進化改善に繋げる方向づけをし
て、大切に推し進めているかを分

かってほしいことなのである。
この頃では犬を多く飼うことそのものが法律で規制され、また世間の目も大変厳しいものになってきている。

万人の前で証明したい

世間の目や批判、そのうえ莫大な経費と想像外の重労働で一日たりとも休めない。それでも「猪犬は必ず作るんだ」と挑戦し続けることは、猪が大好きでよほどの財力がない限り猪犬作りの難題は乗り越えられないと思っている。

「月に叢雲、花に風」と言われるように、物事の良い状態はとかく長続きしないものである。前途を遮る雲や風は英知をもって吹き飛ばし、見事な花を満開にさせる若者たちが一人でも多く出現して、立派な成果を出し、ぞっくり成長していくことで、右肩下がりの狩猟界を蘇らせていただきたい。

そして美しい花を見て、一緒に喜び、心より高笑いしたいものがある。

そのためならば、私は猪犬作り

の難題や猪犬の極意など、やり通して覚えた体験による秘策に至るまで、すべてを惜しみなく公開してその手助けをしたいのである。しかし、現実問題として狩猟そ



ゲン号とサクラ号のコンビ。名犬ゲン号は一五三キロの猪をおびき寄せて私に撃たせてくれた。特に射撃め芸より咬みに入るが、大猪はパンチを繰り出すようにバツと咬みすぐ離れ、後ずさりしながら大猪を怒らせ私の前に引き出してくる

のものや犬を飼うことさえもままならない状況の中で、猪犬作りを続けていくことは、どんなに頑張ったところで個人の犠牲や財力ぐらいでどうなるものでもない。さらに立派に完成させ、気の遠くなるような年月をかけて守り続けることには限界を感じているところでもある。

せめてみんなが猪犬を志したからには、私欲を抑えて大道につき、覚悟して狩猟界の発展に協力してほしいと思っている。

元々、猪犬人はみんなが同志である。良い犬たちができて喜び、一緒に良い猪犬を養い、もって沈滞ムードの狩猟界を立て直すためには、ぜひ同志の協力や横の連係を強めていただきたい。

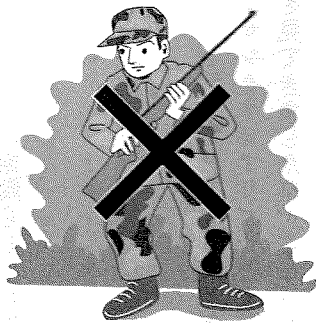
そんなことを契機に、創意工夫して、狩猟界全体の健全化に貢献してもらいたいものである。

私は及ばずながら、その先頭に立って良い道案内ができるように猪犬作りや猪犬法を順次発信していくつもりである。

その手はじめが猪犬と登る猪犬の頂点であり、あと一秋で山彦会

千葉支部を頂点まで必ず導きたいと思っている。その中で名犬の戦いぶりや、一廉の猪犬人に成長する若者たちの雄姿をお伝えすることで、何とか難題の猪犬作りや何年もかかってしまう猪犬の難問も、このようにやるのが一番良く、早い方法であると万人の前で証明したいのである。

このことは私が猪犬人としての最後の使命と思っていると同時に、この思いを狩猟人すべての心根に訴え、その先に繋ぎたいのである。(つづく)



猟装に注意

迷彩色・迷彩帽は着用しないこと